

私が著者に期待する「状態史」も、このような「記録」の構造をもつものではないかと考える。とくに、本書の著者は、「生活」(岩波新書)。「都市の貧困」(一九五八年・三一新書)「生活費」(三一新書)などによって、働く人々の貧しき、みじめさを描き出して、何が、記録されるべきかを、きびしく決定してきている。本書が「状態史」であることから、とくに、第四章、第五章を中核として、資料の選択、設定について、あるいは、理論の構成について、著者の「目撃」による扱いを次稿に期待したいものである。労働者階級存在状況の通史として、提示された各歴史段階の資料、比較データは、豊富であるから、本書によって得られる研究上の便宜は大きいものがあることはいうまでもない。

「日本労働者階級状態史」一九六一年七月

B5版・五四八頁・定価二、一〇〇円

森 喜 一 著 (一九〇〇年生)

三一書房刊

Richard A. Cloward & Lloyd E. Ohlin

Delinquency and Opportunity :
A Theory of Delinquent Gangs

——非行問題研究におけるアノミー論の展開——

井 垣 章 二

現代犯罪学は、その原因論にかんして、二つの流れの合流過程にあるといわれる。一つはC・R・ショー、E・H・サザーランド等シカゴ学派によって代表される非行の文化理論であり、もう一つはR・K・マートンによって代表される、非行への圧力の源泉としてのアノミー論である。前者は、社会的分化の生態学的過程にとらわれ、その焦点を小地域(スラム)に固定し、非行に至るためにはその(それを習得し実行する)機会、すなわち非合法的機会にさらされることを強調し、一方、後者は、全体社会的パースペクティヴに基づき、非行に至るためには文化的目標達成のための合法的機会接近の可能性が限られていることを強調した。人はそのおかれるところによって、合法的機会接近にも非合法的機会接近についても差異を有するに相違ない。かくて、逸脱行動の起源にかんする適切な説明のためには、両者は統合されるべきはずのものであった。本書は、コーヘン(A. K. Cohen)による

“Delinquent Boys: The Culture of the Gang, 1955” となっていて、かかる企たでの注目すべき一つであって、著者はいずれもコロンビア大学ニューヨーク・スクール・オブ・ソーシャル・ワークの教授、本書はマートンとサザーランドとに捧げられている。

(1) C. R. Shaw, *The Jack-Roller, 1930; The Natural History of a Delinquent Career, 1931; Delinquency Areas, 1940; Shaw & H. D. McKay, Juvenile Delinquency and Urban Areas, 1942.*

E. H. Sutherland, *Principles of Criminology, 1947* (4th ed.); *The Professional Thief, 1937.*

(2) E. Durkheim, *Le Suicide, 1897; R. K. Merton, Social theory and Social Structure, (Rev.) 1957.*

まず著者は、その研究対象とする非行を、非行サブカルチャー——集団の規範によって支持される非行に限定した。この対象設定には、シカゴ学派の直接的な影響をよみとることができようが、彼等にとっては、それは、多く下層階級にみられるこの種の非行は、非行のうち最も深刻な問題を形成し、ゆえにその究明は非行の精髓の探求とともに、大きな社会的意義も有するからであった(10—11ページ)。かかる対象の限定は他の一切の非行を除外することによって、彼等の非行研究の限界となったが、しかし、非常に明解な論理の展開を可能にしたことでは大いに成功であった。

ところで、非行サブカルチャーを問題としてとりあげ、入念な検討を重ねたのはシカゴ学派の大きな功績であった。しかし彼等

Delinquency and Opportunity: A Theory of Delinquent Gangs

はすべて非行サブカルチャーを既存のものとして取扱っており、このことが、著者によれば、この学派の大きな限界なのであった。かくて、この限界を打ち破るもの、すなわち下層社会において非行サブカルチャーが如何にして形成・発展されるかが本書の中心課題となるのである。彼等はこの問題を、非行に至らしめる、まず(一)圧力の源泉があり、次に、それが惹き起す(二)適応問題(the problem of adjustment)そして最後に、その打開策としての(三)非行適合(delinquent adaption)という三つのレベルで考察を進めていく。その批判検討にうつる前に、まず、本書の主要点を要約してみよう。

一、圧力の源泉

著者は、青年期危機説、文化葛藤説、および新しいものでは母親中心家庭説(female-centered household)等を非行サブカルチャーとの関連において検討し、これらのいずれもが、その出現を適切に説明し得ないことを示しながら、アノミー論に活路を求めていく。目標の規制における破壊、人々の欲望の無限化が逸脱行動への絶えざる圧力行使するというデュルケームの説は、周知のように、アノミーは、目標とそれに近づく合法的通路との間の関係における破壊のゆえに発展されるとするマートンによって大いに前進された。たとえ限定された目標であっても、それを達成する合法的可能性が制限されている場合には同様の圧力が作用するであろうし、社会構造に占める位置の違いによってその圧力のきびしきは異なるであろう。このマートンに従って著者は、欲望とそれの達成の合法的機会との間の齟齬は、適応問題の主要な

給源であり、これは目標と機会との分離が最も大きい下層階級において最大となる、という基本的仮説を決定するのである。(第二、三、四章)

二、適応問題とその解決策としての非合適合

以上をいいかえると、下層階級は彼等の利用できる合法的機会にくらべては欲求水準は不当に高く、現状についての不満は大きいということにならう。そして非行は、この適応問題に対する一つの逃げ途である。この過程は、著者によって次のように説明される。

まず、現行規範を正当なものとして支持しなくなる。非行適合への第一段階は、失敗や不幸を自身ではなく体制に帰し、現体制のゆえに不当な損失を蒙っているという意識にはじまる。そのとき、行動形態に含まれる便宜的側面と、道徳的側面とが分離され、規範が便宜に基づいて規定されるとき、自分に一そう利益になる規範(非行)を正当とする途が開かれるであらう。そして、著者によれば、こうした非難こそが孤立適合ではなく、集合適合(非行サブカルチュア)に至らしめる要件でもある。すなわち、体制に帰するものは支配的文化のイデオロギーの担い手との間に大きなテンションを生むわけであって、このテンションや規範からの分離の不安定状態を解消するために、彼等は、相似た条件にあり、同様の考えをもつ他人を求めることになる。相似たものの相互作用によって集団は徐々に明確に形成されていき、非行規範が確立され、非行は集団の支援によって大きな安定性を獲得するに至る。集団形成の端緒をひらく相互作用のためには、それが可能となる程度に、個々人が空間的に限定されていることが必要で

ある。スラムと非行サブカルチュアとの重要な接点がこの存在するのである。(第五、六章)

三、非行サブカルチュアの分化

さて、本書の特質は、非行サブカルチュアを犯罪(脅迫、盗み)闘争(暴力)逃避(麻薬使用)の三サブカルチュアに分類し、それをスラム・コミュニティの構造の差異に結びつけたことであつた。著者は、最初未分化な非行サブカルチュアが分化されていくというコーヘンの説を排し、習俗的および逸脱的、二価値体系の統合の程度によって、スラム非行地区の分類を行ったコブリン(S. Kobrin, "The Conflict of Values in Delinquency Areas", American Sociological Review, Oct. 1951)の説を採用する。

犯罪サブカルチュアは、この二価値体系の統合度の高いスラムに栄える。すなわちそこでは、目標達成のための稀少な合法的手段にかわる非合法手段がスラムの構造的部分として統合され、犯罪者は犯罪者として他から孤立するのでなく、地域に存在する種々な半非合法的職業者のみでなく、平常社会の人々と関係を維持し、そのボスは他のコミュニティ生活における有力者として君臨する。いわば犯罪活動はコミュニティの支持を得、その成功者は地区における成功者とうけとられる。非行サブカルチュアは成人犯罪集団へ密接に結びつくことによって、その成功者をモデルとする青少年に地位上昇の特別なルートを開くことによって、彼等を引きつける。

闘争サブカルチュアは、前記二価値体系が統合されず、絶えざる移動、変動によって安定した組織を確立し得ない非統合スラム

に現われる。すなわちそこでは、文化的目標への合法的機会とにも、統合スラムにおけるような非合法的ないし犯罪機会も準備し得ない。かくて成功への途は二つとも閉ざれることになり、するどいテンションが生れる。この場合、かかる適応問題の解決のためには、ただ自分自身の資源——腕力、勇気、忍耐——にたよる以外にない。そこに暴力活動展開の基盤があり、暴力の操作を地位へのルートとする闘争サブカルチュアが誕生することになるのである。

逃避サブカルチュアは、合法手段とともに以上二つの非合法手段双方の利用に失敗するところに現われる。逃避主義は、マートンによって、合法手段による目標達成の失敗を、内在化された禁止（習俗的規範の支持）のゆえに、非合法手段の利用によってカバーできない場合現われるものと考えられたが、著者はこの型の一つの極致を示す麻薬使用が、多くの場合、使用に先立って非行の経験を有すること、すなわち習俗的規範に対し非好意的であるという事実から、新しい提案をしている。内的禁止のゆえではなく、この場合もやはり機会が限定されているからである。すなわち、合法界におけると同様、非合法界においても、地位を得、成功を克ち得るものは、やはり限定されている。青年前期では利用できる地位上昇の途は、青年後期ではかなり限られたものとなるし、また闘争サブカルチュアにしても成人期への接近につれ新たな成人期待の圧力は、暴力の価値をゆさぶり、かくていずれもきびしい地位ディレンマにおとし、れることになる。そして、その逃げ途が麻薬なのである。また、逃避や麻薬使用は孤立適合と一般に考えられるが、これに対して著者は、その使用法を習得し、

さらに安定した供給をうけるためには、他人と結びつくことを不可避とするところに、その集合適合の手掛りを求めるのである。（第七章）そして、一度形成された以上三つのサブカルチュアは、近隣における一つの勢力として存在し、より広い範囲のものを吸引することになるのである。

ところで、こんにち、かつてスラムの統合に作用していた犯罪サブカルチュアは、賭博シンジケートの形をとる壮大な犯罪大企業の出現とそのビュロクラシーによって、局地的スケールにおけるその組織を無力化し、スラム組織の解体を押し進めている。また、政治も同じように局地的意義を喪失したことは、さらにこの解体に拍車をかけるのである。これからの非行は、暴力とそして麻薬使用にますますその比重をかけることになるであろう。そして、これを阻止するためには、合法的でしかも機能的な、社会統制と地位上昇の通路を準備する新たな構造が発展されなければならない。非行追放の主要な勢力は、要するに、スラム・コミュニティの再組織に向けられなければならないのである。これが、予測と統制という科学の究極の使命に対する著者の回答であった。

×

×

以上の検討から、第一におこる簡単な質問は、かかるサブカルチュアに基づく非行は全体の非行のうち、如何ほどの比重をしめるかということであろう。非行のほとんど大部分が集団によって犯されるといふ、ショーによる証明（Juvenile Delinquency—A Case History, 1933）は、こんにちでもそれをくつがえすデータはないと彼等自身いうものの（四二ページ）単なる集団犯はこれ

を包摂し得ない彼等の非行サブカルチュアにとっては、それは効力のある引用とはなっていない。J・トビー(J. Toby, *Delinquency and Opportunity*, *British Journal of Sociology*, Sept., 1961)が、それは少年裁判所によって取扱われるケースの一〇パーセントぐらいではないかと推測しているように、非行全体に定めるその割合はむしろ少なく、特殊な一部ではなからうかという疑問は、恐らく多くの人々の胸を通過するであろう。中層階級の非行は除外するとして、それを下層の典型としても、下層の非行がすべてそうなのではないであろう。

次に、中心的な問題として、著者の「圧力——適応問題——非行適合」のスキームは充分納得のいくものである。圧力そのものは最終的な適合の型を規定しないという考察も同様である。アノミー論は、「文化的に生じた目標と社会構造上の機会との矛盾から生ずるひどい圧力を中心として取扱っている」こと、かくて、「通常、犯罪行為とか非行とか呼ばれている逸脱的行動形式のすべてを説明するのではなく、その一部を説明しようとしたのである」ことは、マートンによって、すでに十分認識されていた。(Social Theory and Social Structure, Rev. 1957 森 他訳 一六四—一六五頁) 著者は前述の通り、マートンのひどい圧力を「ひどい適応問題」としてうけとめ、この適応問題がスラム社会構造を介在変数として屈折される様態を描くことによって、この問題をさらに詳細に展開したのであったが、マートンにせよ、著者にせよ、要するにアノミー論としては、そもそもの基本問題としてこの適応問題の深さとひろがり、下層階級において事実どのようなものであるか検討を必要とする。文化的目標は内在化されて

のみ、非行適合に至る適応問題を生むわけであり、かくて、社会的下層において文化的目標が現実にとの程度内在化されているかが明らかにされなければならない。

マートンは、種々異った階層が成功の文化的目標をどれだけとるか、相対的比率を明らかにし、上層ほどその比率が大きいことを証明したハイマンの調査データ(H. H. Hyman, *The Value Systems of Different Classes: A Social-psychological Contribution to the Analysis of Stratification*, in R. Bendix & S. M. Lipset, eds, *Class, status and power*, 1953)を、下層人口の大きさを考慮することによって、その絶対数は大きいという解釈を付与することによって自己の領土に引き入れた(前掲書一六一—一六二頁)。著者は、同じくこのハイマンのデータをはじめ、エムゴイ(L. T. Empey, *Social Class and Occupational Aspiration: A comparison of Absolute and Relative Measurement*, *American Sociological Review*, Dec. 1959)その他を参照し、下層階級の欲求水準は、より上層のものにくらべて絶対的レベルでは低いが、現在の地位・条件に照らして、不相応に高く、現状についての不満が大きいという主張を導き出す(八七—九〇ページ)。そして不当な損失の意識に関連する体制への非難の問題では「アメリカン・ソルディア」における昇進問題にかんする調査までもち出すのである(一一五—一七ページ)。これらは、以上の基本問題にかんする、著者のマートンへの努力の積み重ねとして評価されるが、非行が中心の問題として扱われる以上、それにさらに直接的に関連するデータを整える必要が望まれるはずである。

著者は下層青少年を (1) 中層階級への所屬と経済的地位改善を同時に目指すもの (2) 経済的地位改善よりはむしろ中層階級所屬を第一義とするもの (収入は少なくとも中層階級の職業を) (3) 中層階級所屬は目指さず、自身の文化環境内において地位、ことに経済的地位を求めもの (中、下層いずれの平常の生活スタイルにも満足しない) (4) 中層階級所屬を目指さず下層の現状に満足するもの、の四類型に分かち、非行カブカルチュアの主要給源を(3)に求めた(九四—九七ページ)。これは、著者のもう一つの新たな努力として評価されよう。この点について、コーヘンは非行少年の欲求水準の高さを中層階級志向によって考えることによつて決定的な批判を蒙らなければならなかつた。(たとえ H. M. Shulman, *Juvenile Delinquency in American Society*, 1961, p. 177 を見よ) すなわち、同じ下層青少年を非行とそれに至らないものとに分化せしめる諸因子の探求を中心課題としたグルェック(S. & E. Glueck, *Unraveling Juvenile Delinquency*, 1950) は、非行者家族のかかる意味での欲求水準は安定したスラム住民のそれよりは劣ることをすでに明らかにしているからである (op. cit., p. 110)。この批判がそのまま著者には当てはまらないことは、確かに一つの前進としても、下層青少年四類型を分化せしめる技術的操作を今一步詳細に規定する必要があつたらう。グルェックのデータについても著者の何らかのコメントを求めたいところである。

次に、犯罪、闘争、逃避の非行カブカルチュア三分類の問題についてみてみよう。これも、「野球道具を盗んだ青少年の行動と外集団のメンバーにときどき暴行を加える青少年の行動とがその

意味を同一にするかどうかは疑問」であり、「犯罪とか非行とかいう一題目のもとにきわめて多くの行動を包括してしまうと、この範疇に属する行動の全範囲を単一な理論で説明できるという仮定を生じがち」(前掲書一六三—一六四ページ)な陥穽を気づいていたマートン理論の重要な展開の一つである。非行カブカルチュア三類型を、犯罪カブカルチュアを基軸に据えながら、スラム構造の特性に関連させたところは、非常に興味深い分析である。しかし、現存する非行カブカルチュアをかように明白に分類することはもちろん、非行カブカルチュアの発見とそれへの接近そのものにして、実際上は多くの困難が予想されそうである。

ここに、その詳細は割愛しなければならないが、著者の理論を仮説として実地調査を試みたスペーゲルの研究 (I. Spengel, *An Exploratory Research in Delinquent Subcultures*, *Social Service Review*, Mar., 1961) を参照するのが適当であらう。

彼は、対象近隣の選定を、高度なラケット活動の評判のあるところ、暴力ギャングの多発が注目されること、非行は広汎に存在するが、サブカルチュアはないところ、というかたちで行っている。そして彼は、非行の特質形態を明確ならしめるため最悪の非行集団を、社会機関、警察、青年たちの世論に基づいて選定することは困難ではなかつたといはするが、顕著なものとは別として判然としないもの分類にこそ、この理論が役立つなければならぬとすれば、このアプローチは大いに限界をもつであらうし、また彼自身、判然としたものは理想として求め得ず、それに選定されたギャングは各地区を特質づける質の平均を示すという意味では、典型的ではないことを認めなければならなかつたのであ

る。さらに、彼の調査は各地区の長期間の継続的観察や非行少年とのフォーマル面接等を含むかなり丹念なものであったが、この労力のわりに、科学的に整備されたデータの提示は仲々得られるものではないことを物語っており、この理論の調査設計には多くの困難があり、なお多くの検討の余地を含むことを暗示している。

全体を通じていえることは、本書は事実的データに基づく操作的叙述によらず、推論的説明にたよっていることである。非行サブカルチャーが多く下層社会に存するということですら、何らかのデータを提示する努力はなされていない。著者のコトバをかりていえば「多くの観察では」そうなのである(二八ページ)。その他「われわれの印象では」「われわれの主張は」というようなコトバは文中随所にあられるし、「試論にすぎない」ということわりも重要なところででてくる。著者は、彼ら自からの主張を、適切と考える既存のデータを関連させながら、強力に貫徹いた、という感じをうける。このことを考慮に入れば、本書の意義ははばからず主張してよい。すなわち、それは、何よりもアノミー論の少年非行問題における新しい展開として特筆すべきものであるし、非行問題研究については多様な諸因子の羅列に終わってしまうようなテキストブック式著作の多い中で、その一貫したアプローチは見逃がせないし、さらに、下層社会の分析に有用な仮説を提示したことも功績の一つに数えられるであろう。

最後に、われわれの最大関心である、わが国の場合に対するこの理論の適用可能性について一言述べておこう。著者自身、非行サブカルチャー形成発展過程と移民の社会的同化諸段階との関連

を追求しているように(一九四—二〇二ページ)、また前述のスパイゲルが選定したスラムはイタリヤ、フェルト・リコおよび諸人種混合といういずれも移民地区であることを知れば、それとは本質的に異なるわが国の下層社会には全く応用できないという感じがなくてもない。しかしアノミー論は人種的因子に本質的にかかわらないし、また、アメリカでは下層社会イコール移民地区という等式が成立しているだけのことと考えることもできる。要するに著者の「分化的機会体系論」(differential opportunity systems theory)は、わが国においても有用な仮説としてその意味を失わないであろう。もし大きな食違いが発見されるなら、それはわが国の文化構造や下層社会の特性に何らかの光を投げかける手掛りを提供することにもなるであろう。

(Routledge & Kegan Paul, London, 1961)